

17時作業を終了した。

11月9日(木) 晴

行動最終日であるので溶岩採取のため全力を注いだ。先端部に2つのルツボを用意し 第4回の採取を行なった。ω地点の監視隊員に辻本がなり慎重に作業した結果 溶岩湖に命中したものの前回と同様 下位のルツボは溶岩に奪われた。残ったワイヤーの先端に第2回採取の際よりも大きい飛沫が付着し 上位のルツボの中にも飛沫が入りこんでいた。この間宇田川を先導とした4名の別働“必死?”隊が新ルート発見に挑戦し火孔底が望める地点を探索した結果 火孔南壁の岩砕丘(昭和山)から火孔壁側へ下ったところで溶岩湖を望める地点を発見し Z地点と定めた。また 測量班によりTBの降下ルートが測量された(三角高低測量)。そして 午後から撤収作業を行ない 夜ベースキャンプで溶岩採取成功を記念して酒宴が開かれた。

11月10日(金) 雨

朝 ベースキャンプのテントなどを撤収後TAに向かう。雨の中で撤収作業を行ない 午前中にほぼ完了した。資材・装備を町役場の車に積み込み岡田港へ向かう。16時50分 ドシャ降りの中をカトレア丸に乗船 誰一人欠けても成就しなかったであろう今回の計画を隊員一人一人が自覚し 新たな挑戦に身構える大島三原山を後にした。21時 竹芝棧橋にて隊を解散し全作業を無事終了した。

5. おわりに

今回採取された溶融溶岩をはじめ 作業現場周辺の岩石や作業に用いた資材の一部は広く各界の便に供するように国の機関である地質調査所に保管していただき 同所の一色直記博士には 岩石の分析・鑑定をお願いした。三原山火孔探査隊の目的はあくまでも純粋な探検精神にのっとったものであるがややもすると学術的なメスの加えがたい火孔内の問題に関して力及ばずといえども斯界に貢献できることを願っている。このあとまたひきつづいて第5回の探査を計画している。今後とも関係各位のご協力を望むしだいである。

次に 本計画の当初から東京都立大学名誉教授野口先生には特別お世話をいただいた。さらに観測器機および探査に必要な諸資料を提供くださった気象庁および大島測候所 資材・装備の面で力を貸してくださった関係各位には紙面をもって謝意を表したい。また 計画のたびに大島の町役場をはじめ火口茶屋や地元の方々には筆舌につくしがたいお世話をいただいた。

(筆者らは 早大探検部員および地質部)

6. 引用文献

- 1) 恵谷治(1971): 1969年以降三原山計画関係経過報告. 2p. (M.S.).
- 2) 恵谷治(1972): 地底に太陽を見た. 朝日新聞社(編) 探検と冒険 vol.7 p.67-79.
- 3) 早稲田大学探検部(1968a): 第1回三原山火孔調査報告—1968年7月4~10日. 17p. (M.S.).
- 4) 早稲田大学探検部(1968b): 第2回三原山火孔調査報告—1968年10月14~21日. 28p. (M.S.).
- 5) 木沢毅・田中康裕(1972): 伊豆大島三原火口の地形測量. 気象研究所研究報告. vol.23 (印刷中).

特別講演会

地球科学の将来ビジョンと 地質調査所への期待

—各界からの提言—

<とき> 48年3月22日(木) 9時30分—17時

<ところ> 川崎市高津区久本135
地質調査所 溝の口4階会議室

<講師> ~午 前~
地質学(日本学術会議) 大森昌衛(東京教育大)

海洋地質学 奈須紀幸(東京大学海洋研究所)
環境地学(地質コンサルタント)武田裕幸(国際航業)

~午 後~

地球物理学 上田誠也(東京大学地震研究所)
地球化学 松尾禎士(東京工業大学)
鉱山地質学(鉱業界) 西脇親雄(資源開発大)
鉱物学 砂川一郎(東北大学)

補足・コメント 各講師

主催: 地質調査所
研究発表会運営委員会

連絡先: 総務部業務課 佐々木雅一
☎(03) 341-7 1 3 1